

◆ 調査概要

本調査は、2006年度に日本と韓国の2カ国で実施した「東アジア高校英語教育GTEC調査2006」の結果をもとに、二次調査として2008年3月に韓国にて実施したものです。

1. 調査テーマ

- ・「東アジア高校英語教育GTEC調査2006」（以降、「東アジア調査2006」）において、韓国が好結果*であった要因を探り、日本の英語教育の今後のあり方を考察する。
 - ・韓国の英語教育の最新動向（小学校英語教育、アセスメント、教育政策など）を探る。
- *詳細は、「東アジア高校英語教育GTEC調査2006」結果サマリー（p.6）参照。

2. 調査時期

2008年3月24日(月)～26日(水)

3. 調査対象

	教員（人）	生徒〔高2〕（人）	
		男子	女子
A高校	1	—	5
B高校	1	—	5
C高校	1	5	—
D高校	1	5	—
(小計)	4	10	10
合計		20	

*「東アジア調査2006」の調査対象校（5校）のうち、ソウル市内および近郊の4校を調査対象校とした。

*「東アジア調査2006」では、高校1、2年生を対象としているが、二次調査では、実施時期が韓国の新年度の開始時期（3月）であったことから、対象を高校2年生に絞った。

*A高校、B高校が女子校であったことから、A高校、B高校では女子5人を、C高校、D高校では男子5人を調査対象生徒とした。

4. サンプル抽出方法

下記条件にて、調査対象校に、教員・生徒のサンプルの抽出を依頼した。

- 1) 教員：英語科主任、もしくは、同校の英語教育全体を把握する立場にある英語科教員
- 2) 生徒：各校とも「成績中位層」の生徒

*なお、「東アジア調査2006」の調査対象校については、以下2点を必要条件として抽出した。

- 1) 学校全体として、4年制大学への進学を目指す指導を行っている高校であること
- 2) 原則的にGTEC for STUDENTSを校内で学年全体として一斉受検していること

*また、韓国（ソウル市近郊）では高校入試が実施されておらず、居住地域の学校に生徒が進学をしているが、どの地域にある学校かによって学校の特色が異なっている。そのため、調査対象校については、地域による偏りが出ないように配慮をした。

*本調査結果は、上記条件のもとに有意に抽出されたサンプルのものであり、韓国の高校英語教育全体を代表するものではないことをあらかじめご理解ください。

◆ 調査概要

5. 調査方法と調査内容

		調査方法	調査内容
生徒	①生徒インタビュー調査	各調査対象校にて、1グループ5人のグループ・インタビュー(50分間)	<ul style="list-style-type: none"> ・英語使用経験 ・英語に対する意識 ・学校外での英語学習 ・これまでの英語学習
	②生徒アンケート調査	質問紙による自記式調査(インタビュー終了後に依頼、後日回収)	<ul style="list-style-type: none"> ・就学前の英語学習経験 ・小学生時の英語学習経験 ・中学生時の英語学習経験 ・現在の英語学習 ・英語圏への渡航経験 ・日常生活での英語使用経験 ・資格試験
教員	③教員インタビュー調査	各調査対象校にてインタビュー(50分間)	<ul style="list-style-type: none"> ・学校での英語教育(授業の内容、授業以外の取り組み、入試の影響など) ・生徒の英語使用経験 ・生徒のこれまでの英語学習
	④教員アンケート調査	質問紙による自記式調査(インタビュー終了後に依頼、後日回収)	<ul style="list-style-type: none"> ・学校での英語教育(カリキュラム、自学設備・施設、シラバス、校内研修など) ・生徒につけさせたい英語力

*上記のインタビュー調査内容は、あらかじめ日本語で作成し韓国語に翻訳しておいた。その上で、生徒インタビューは、韓国人インタビュアー1人が韓国語のみで実施し、日本人研究者には別途同時通訳を入れた。また、教員インタビューは、韓国人インタビュアー1人が、質問項目ごとに教員の回答と日本人研究者からの質問を通訳をしながら実施した。

<補足> 調査対象校4校のうち、下記3校にて授業見学を実施した。

	学年	科目
A高校	1年生	英語
C高校	2年生	英語 I
D高校	1年生	英語

6. 情報収集

韓国の英語教育全体の現状と最新情報を得るため、下記のとおり情報収集を実施した。

訪問先	内容
ヨンジ初等学校	<ul style="list-style-type: none"> ・学校長聞き取り調査 ・英語専科教員聞き取り調査 ・授業見学(2クラス:小学4年生、小学5年生)
韓国教育課程評価院(KICE)	<ul style="list-style-type: none"> ・英語教育政策研究センター(Lee, Byeong-Cheon先生)聞き取り調査

7. 関連調査

本調査は、「東アジア調査2006」の二次調査である。また、「東アジア調査2006」は、2003年度に実施した「東アジア高校英語教育調査」および2004年度に実施した「東アジア高校英語教育GTEC調査」の継続調査として、一部項目を見直して日本・韓国2カ国で実施したものである。

2006年度「東アジア高校英語教育GTEC調査2006」日本・韓国で量的調査を実施



2007年度「東アジア高校英語教育GTEC調査2006」二次調査 韓国で現地調査を実施

なお、「東アジア調査2006」の調査結果は、Benesse教育研究開発センター（2007）『東アジア高校英語教育GTEC調査2006報告書』、および、Benesse教育研究開発センター（2008）『東アジア高校英語教育GTEC調査2006報告書（改訂版）』^{※1}にまとめられている。

※1『東アジア高校英語教育GTEC調査2006報告書』第3章、第5章、第7章については、日本のライティングスコアを韓国との比較のために換算したスコアへの変更を行ったため、再分析を行い、その結果を『東アジア高校英語教育GTEC調査2006 報告書（改訂版）』にまとめている。報告書は下記URLで閲覧が可能。
<http://benesse.jp/berd/data/index.shtml>

「東アジア高校英語教育GTEC調査2006」 結果サマリー

本調査では、「東アジア高校英語教育GTEC調査2006」（以降、「東アジア調査2006」）で韓国が日本を大きく上回った2つの調査結果に焦点をあてている。以下、「東アジア調査2006」結果サマリーとして、その2点（英語使用経験率とリーディング、リスニングのスコア）をふりかえる。

「東アジア高校英語教育GTEC調査2006」調査概要

●調査テーマ

東アジアの2カ国（日本・韓国）における高校生の英語コミュニケーション能力と学習習慣や意識、英語使用状況や教員の指導方法の調査から、両国の英語教育の実態を把握し、課題を明らかにする。

	韓国	日本
調査時期	2006年9月	2006年7月～2007年1月
調査対象	高校1・2年生4,019人 教員43人 [学校数5校]	高校1・2年生3,700人 教員65人 [学校数10校]

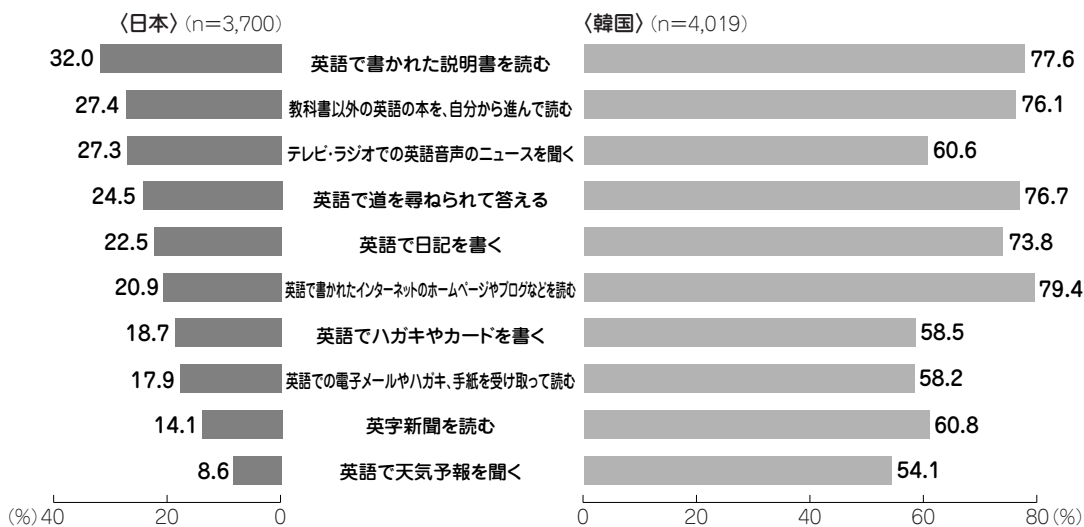
- ### ●調査方法
1. 英語コミュニケーション能力調査：会場型試験[GTEC for STUDENTSを用いて、リーディング、リスニング、ライティングの3技能を測定]
 2. 生徒アンケート調査：学校通しの質問紙による自記式調査
 3. 教員アンケート調査：学校通しの質問紙による自記式調査

* 調査対象校については、以下2点を必要条件として抽出した。

- 1) 学校全体として、4年制大学への進学を目指す指導を行っている高校であること
- 2) 原則的にGTEC for STUDENTSを校内で学年全体として一斉受検していること

結果1. 韓国の生徒の英語使用経験率が高い*1

図1 日韓高校生の国内での英語使用経験（やったことがある）



* 韓国では、「学校外の日常生活で英語を使う場面や活動に関する質問」という形でたずねている。また、日本と韓国で異なるアンケート項目のため、共通する項目のみ集計した。

* 日本：「（経験が）ない」「無答不明」以外の%。韓国：「（買ったことがない、したことがない、等）」「無答不明」以外の%。

一つめの結果は、韓国の高校生の日常での英語使用経験率が高かったことである。韓国の生徒は、すべての項目で経験率が5割を超えており、また、日本の生徒の経験率と比べて約30～60ポイントも高くなっている（図1）。また、日常での英語使用経験率に比べると差は小さいものの、英語圏での英語使用経験率についても、日本の生徒に比べて韓国の生徒のほうが全般的に英語を使用している、という結果であった。

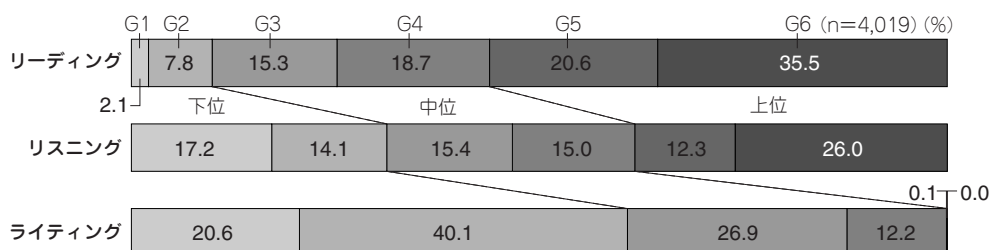
結果2. 韓国の生徒のリーディング、リスニングのスコアが高い*2

表1 英語コミュニケーション能力調査結果（GTEC for STUDENTSの平均スコア）*3

	リーディング (320点満点)	リスニング (320点満点)	ライティング (160点満点)	トータル (800点満点)
韓国 (n=4,019)	205.5	187.6	66.5	459.6
日本 (n=3,700)	153.2	163.7	91.4	408.3

* 本調査では、日本と韓国で受検したGTEC for STUDENTSのテスト回が異なっている。このため、表中の日本のスコアは韓国のテスト回との比較用に換算したスコアを表示している。

図2 韓国の3技能（リーディング、リスニング、ライティング）別グレードの割合



* G1～6は、GTEC for STUDENTSにおける3技能（リーディング、リスニング、ライティング）それぞれのグレードを表す。
* G5・G6を上位、G3・G4を中位、G1・G2を下位とした。

二つめは、韓国の生徒のリーディング、リスニングのスコアの高さである。韓国の生徒の平均スコアは、リーディングとリスニングで日本の生徒のそれを大きく上回っており、リーディングではその差が50点以上、リスニングで20点以上（320点満点中）であった（表1）。また、韓国の生徒のリーディング、リスニングの力の高さは、技能別のグレード分布の割合でも明らかである（図2）。リーディングでは56.1%と半数以上、リスニングでは38.3%と3分の1以上の生徒が、上位層に位置している（これに対して、日本の上位層はリーディングで17.5%、リスニングで18.7%であった）。

*1 詳細は、Benesse教育研究開発センター（2007）『東アジア高校英語教育GTEC調査2006報告書』参照。報告書は、右記URLにて閲覧可能。http://benesse.jp/berd/data/index.shtml
*2 詳細は、Benesse教育研究開発センター（2008）『東アジア高校英語教育GTEC調査2006報告書（改訂版）』参照。報告書は、右記URLにて閲覧可能。http://benesse.jp/berd/data/index.shtml
*3 GTEC for STUDENTSのスコア・グレードの詳細は、資料編P.78を参照。GTEC for STUDENTSでは、3技能それぞれのスコアによってグレード1（低）からグレード6（高）までの6段階のグレードに分けられる。

韓国の英語教育の状況

教育全般について

1. 教育制度

韓国の学校制度は、日本と同様に6年間の初等学校（小学校）、3年間の中学校、3年間の高等学校の6・3・3制となっている。義務教育は、初等学校、中学校の9年間である（表の網掛け部分）。

学年	初等教育						前期中等教育			後期中等教育		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	・初等学校 ・6～12歳						・中学校 ・12～15歳			・普通高等学校/職業高等学校/特殊目的高等学校(外国語、芸術・体育、科学高等学校)*1*2 ・16～18歳		

大韓民国教育人的資源部（2005）、国立教育政策研究所（2004）より作成

2. 高校進学率と高校入試

高等学校への進学率（全日制進学者、定時制・通信制進学者を含む）は、100%である（2006年）。高校入試については、ソウル市を含む大・中都市での普通高等学校（国・公・私立）では、志願者を居住する地域によって学区内の高校に振り分ける「高校平準化」政策がとられているため、入試として学力試験は実施していない（「高校平準化」を実施していない地域では、学力試験が実施されている）。（参考文献：1、3、9、11）

3. 大学進学率と大学入試

韓国の大学進学率は高く、教育人的資源部（2008年に教育科学技術部に名称変更）の調査を引用した2007年4月27日の『朝鮮日報』によると、82.1%（2006年）となっている。各大学の入試選考は、共通試験である「大学修学能力試験（以降、修能試験）」の成績、総合学生生活記録簿（内申書）と、論述試験（小論文）、面接試験、適性検査など各大学が課した方法にしたがって行われている。「修能試験」は、毎年11月に実施され、公・私立を問わず全大学で採用されている。生徒は、5領域（言語 [韓国語]、数理A/B（1領

*1 特殊目的高等学校（外国語、芸術・体育、科学高等学校）は、それぞれの分野の指導者の育成を目指して設立された学校。

*2 このほか不登校の生徒を受け入れるための特性化高等学校がある。

域選択)、社会/科学/職業探究、外国語 [英語]、第2外国語(漢文)の中から、進学を希望する大学に必要な科目を受験する。なお、英語は必須領域となっている。(参考文献：5、8)

英語教育について

1. 教育課程上の位置づけ

現教育課程(第7次教育課程)では、初等学校の3年生から英語教育を開始している。英語は、初等学校の3年生から高等学校の1年生までの8年間は、必須科目として、高等学校の2・3年生では、選択科目(英語だけでなく、第2外国語のドイツ語・フランス語・スペイン語・中国語・日本語・ロシア語・アラビア語から選択)として学習されている。^{*3}(参考文献：7)

2. 授業時間数

英語の週あたりの授業時間数は下表のとおりである。原則的に、1授業時間は、初等学校では40分間、中学校では45分間、高等学校では50分間となっている。

学年	初等学校				中学校			高等学校		
	3	4	5	6	7(中1)	8(中2)	9(中3)	10(高1)	11(高2)	12(高3)
週あたりの時間数 [科目名]	1[英語]	1[英語]	2[英語]	2[英語]	3[英語]	3[英語]	4[英語]	4[英語]	<選択科目>	
									4[英語Ⅰ] ; 4[英語Ⅱ]	
									3[英語読解]	
									3[英語会話]	
									3[英語作文]	

国立教育政策研究所(2004)より作成

3. 目標

第7次教育課程での初等学校、中学校、高等学校を通じた英語教育の目標として、以下の4点があげられている。

- ・英語に持続的な興味と自信を持ち、意思疎通を図れる基本的能力を養う
- ・日常生活と一般的な話題に関して無理なく意思疎通ができる能力を養う
- ・外国の多様な情報を理解し、これを活用できる能力を養う
- ・外国文化を理解したうえで自国の文化を新たに認識し、正しい価値観を養う

(参考文献：10)

*3 2002年、高等学校で第2外国語を履修した生徒は、約50%(国立教育政策研究所、2004)である。

4. 教科書

初等学校で使用されている英語の教科書は、国定のもので、種類は1種類である。教科書と教科書の内容をカバーしたCD-ROM（またはカセット・テープ）が児童に無料で配布されている。また、教師用の指導書、教室用のCD-ROMも作成されている。中学校、高等学校の教科書は、検定教科書となっている。なお、2008年6月16日時点で、次期教育課程のために最終的に認定を受けた教科書は、中学校が25種（および補助教科書となる「英語活動冊」25種）、高等学校が17種（および「英語活動冊」17種）である。

（参考文献：2、4、10）

5. 修能試験の英語*4

大学入試の共通試験である修能試験で、英語は必須領域である。形式は、リスニング17問を含む、50問の多肢択一問題となっている。

項目	設問数		試験時間	一问あたりの 解答時間 (設問数/試験時間)	点数 (満点)	出題形式
外国語 [英語]	50問	リスニング17問 を含む	70分	1.4分	200点	多肢択一

韓国教育課程評価院（KICE）ホームページより作成

6. 近年の英語教育動向

近年の英語教育の主な動向を以下にまとめる。

- 1993 修能試験にリスニングが導入
- 1997 初等学校（3～6年生）で英語が教科として必修化（3年生から学年進行）
- 2001 第7次教育課程の開始（～現在）
初等学校（3・4年生）の英語の時間を週2時間から週1時間に変更
- 2006 初等学校（1・2年生）での英語教育のパイロット・プログラムの実施

大韓民国教育人的資源部（2006）、文部科学省（2005）より作成

*4 修能試験の問題は、韓国教育課程評価院（KICE）のホームページ上からダウンロードすることができる（韓国語）。

〈参考文献〉

1. 有田 伸 (2006) 『韓国の教育と社会階層—「学歴社会」への実証的アプローチ』東京大学出版
2. 大谷泰照他 (編) (2004) 『世界の外国語政策—日本の外国語教育の再構築にむけて』東信堂
3. 学校教育研究所 (編) (2006) 『諸外国の教育の状況』学校図書株式会社
4. 金 泰勲 (2007) 「韓国の初等学校における英語教育の現状と課題」教育学雑誌第42号
5. 大韓民国教育人的資源部 (2005) 『韓国の教育 2005-2006』
6. 大韓民国教育人的資源部 (2006) “Second Five-Year National Human Resources Development Plan (2006-2010) Unveiled”
7. 国立教育政策研究所 (2004) 『外国語のカリキュラム改善に関する研究—諸外国の動向—』
8. 林 篤裕 (2006) 「韓国の大学入試制度とわが国への示唆」第3回大学入試センター職員研修セミナー (2006.11.29開催) 資料
9. 二宮 皓 (編) (2006) 『世界の学校—教育制度から日常の学校風景まで—』学事出版
10. 文部科学省 (2005) 「韓国における小学校英語の現状と課題」中央教育審議会外国語専門部会 (第9回、2005.11.11開催) 資料
11. 文部科学省 (2008) 『教育指標の国際比較 平成20年度版』

「東アジア高校英語教育GTEC調査2006」 二次調査の意義

上智大学教授 吉田研作

今回の二次調査の目的は、日韓の高校生の英語力および英語学習についてGTEC for STUDENTSとアンケートを用いて行った前回調査で明らかになった結果が何を意味しているのかについて、実際にインタビュー調査や授業見学をすることにより、考えることにあった。前回調査では、韓国の高校生は日本の高校生と比べて、リーディングとリスニングの点数が高いことがわかった。そして、その理由を考える過程で、アンケート調査の結果、韓国の高校生が日本の高校生と比べて英語の使用経験率が約30～60ポイント高いことがわかった。そこで、二次調査では、これらの結果について、実際に韓国で何が起きているか、前回は量的にしかみえなかった現象を、質的に確認することにしたわけである。

今回の二次調査の結果を概観する。まず、高校生に対するインタビュー・アンケート調査からわかったこととして、以下の点があげられる。

- a. 同じ外国語として英語を学んでいる環境にありながら、どうして英語の使用経験で違いが出たのか、という問いについては、単に経験の「ある・なし」だけからみれば、確かに、日韓の高校生の間に大きな差がみられたが、経験の頻度を聞いたところ、何度も経験したことがある、と答えた韓国の生徒は少なかった。つまり、一度は経験をしたことがあったとしても、それを継続的、あるいは、何度も経験している生徒は多くないことがわかった。
- b. 日本の高校生との、より大きな違いは、自宅学習（教材、テレビ、ラジオ等）と塾（あるいは学校での自習室）で英語を勉強する量が違う、ということであった。
- c. 韓国では、既に10年以上前から小学校からの英語教育が始まっているが、高校生自身は、小学生時の英語学習が自らの英語力に影響している、とはあまり思っていないことがわかった。
- d. では、韓国の高校生の英語力に好影響を与えているものは何か、ということにな

ると、日本のセンター入試にあたる大学修学能力試験（以降、修能試験）と教科書の量にある可能性が示唆された。

次に、教員へのインタビュー・アンケート調査からは、以下の点がみえてきた。

- a. 高校生に対する調査からわかったことと共通する点は、やはり、修能試験の影響の大きさである。
- b. 教科書の英語の量が多い上、教室外においても、自習室や塾などで長時間英語を学んでいる。
- c. 英語使用経験については、高校生になると、修能試験のための勉強にほとんどの時間を使っているため、小学校や中学校における使用経験である可能性が高い。実際には、授業中、英語で話すことなどはあまりしていない、という。

上記のような状況を鑑みると、韓国の高校生の英語力には、修能試験が最も大きく影響していることがわかる。前回調査でみられた韓国の高校生のライティングの点数の低さも、修能試験で実際に英文を書く問題が問われないからだ、という。また、授業以外に、校内でいくつかの英語のイベント（スピーチ・コンテスト、スペリング・コンテスト等）が催されているようだが、全体としては、実践的なコミュニケーションの指導はあまり行われていないようであることも今回わかった。

最後に、今回の二次調査の結果から日本の英語教育への示唆として考えられることをいくつか取り上げてみたい。

一つは、英語使用経験が、高校生段階よりも小・中学生の頃に行われていた可能性が高い、ということである。高校生自身は、小学生時の英語学習についてはあまり覚えていないし、影響があるとも思っていないようだ。しかし、韓国でも、小学校においては子どもに英語を体験的に身につけさせることを主眼としているので、高校に進学するまでの間に英語を使う経験をしていることは、知らず知らずのうちに好影響を与えている可能性があるだろう。現に、教員に対する調査からわかった点として、小学校に英語が導入される前と比べて、生徒たちは臆することなく英語を使おうとする、とか、オーラル面での英語力が高い、という印象を教員が持っていることは注目すべきだろう。小・中学校において繰り返し英語を使う経験を積むことで、高校生になって、より特定化さ

れた目的のために英語を学ぶ際にも、何らかの形でその効果が残っている可能性があるからである。

もう一つは、韓国の高校生（少なくとも大学進学を目指している生徒）は、英語を勉強することに対して、否定的な気持ち（なぜ英語を学ばなければならないのか）はあまり持っていない、という点だろう。国家の教育政策が明確に英語の必要性を説いており、大学進学がその後の人生に大きく影響することの自覚が日本の高校生以上に強いのだろう。

さらに、高校の英語の教科書をはじめ、補助教材等で、少なくとも、CALPレベル※1の英語に非常に多く接している、という点も大切である。日常会話というレベルではなく、思考の道具として英語を使う訓練が、日本の高校生以上に出来ているのかもしれない。

韓国では、現状の英語教育のあり方で良いとは思われていない。ライティング力の強化、英語によるコミュニケーション能力の育成等、様々な問題が横たわっていると認識されている。また、修能試験が最も大きな動機づけになっている以上、その試験内容をしっかり見直し、より理想に近い英語力の評価ツールとして役立つようにする必要性を実感しているようである。

日本でも、今回の学習指導要領改訂によって、小学校からの英語（正式には外国語活動）導入と並んで、高校英語の科目設定と教科書内容（量的にも）が改訂の目玉になっている。小学校英語導入により、日常的な英語使用経験が増えるのか、また、高校英語がよりCALP育成に貢献できるようになるかが、今後の課題だろう。

※1 CALP: cognitive / academic language proficiency